



# 元気っ子

No 331 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

先月、参加してきました熊本での保育実践研究大会では、全国の園からの実践発表がありました。その中に親しくさせて頂いている埼玉の保育園さんの発表があり、「自律心」はどのように育つのかを研究した実践発表がありました。「自律心」とは「他からの支配や制約などを受けずに、自分自身で立てた規範に従って行動すること」とあります。もっと簡単に言えば、「やって良いことと悪いことを理解し、それを人からの指示を受けずに、自ら行動に移すこと」だと言えます。

全ての親御さんはお子さんが自律心をもって行動して欲しいと願っていると思います。その願いが強いがために、どうしても口うるさく注意をしたりしてしまうことがあるかもしれません。しかし、残念ながら、口うるさくしてしまえばしまうほど、子どもは自律から遠ざかってしまいます。それでは、どうしたら良いのかを考えたとき、埼玉の保育園さんの発表は次のことが大切だという内容でした。

「自立と自律」が育つためには、その前段階、つまり0歳児から1歳児くらいの時期に、しっかりと「自尊心・自己肯定感」が育まれているかどうかポイントで、それが土台となって「自律心」が育つということです。

つまり、目の前にある子どもの「依存的行動」や「自律していない姿」に対して小言を言うのではなく、まずはしっかりと子どもの気持ちを「受け止め」、自尊心・自己肯定感を育てあげることが第一にしなければならないということです。この土台なくしては「自律」はあまり期待できないかもしれません。

この子どもの気持ちを「受け止める」ということは、しばしば勘違いをされやすい言葉です。それは何でもかんでも子どもの言うことを聞いていたらワガママになってしまうという懸念から誤解を生むのかもしれませんが、「受け止める」と「受け入れる」は全く別モノです。乳幼児期の子どもは無理難題な要求をするものです。それを一つ一つ受け入れていたら、親は破綻します。そうではなくて、そういった無理難題の要求であっても「そうだよね、〇〇ちゃんはそうしたいんだよね。気持ちはすごく分かるよ。でもね・・・」と、子どもの気持ちに共感してあげることで、子どもは「自分は大切にされている存在」として認識を強めていきます。この体験を乳児期にどれだけ積み重ねてあげられるかが、「自律心」の育ちを左右すると言われていました。

この因果関係については、様々な研究で明らかにされています。同様の因果関係は「愛着関係（アタッチメント）」の側面からも読み取れますし、保育所保育指針の乳児期の保育方法にも「応答的な関わりが特に重要」という記述からも読み取れます。これはご家庭でも頻繁に起こる場面だと思います。是非、心掛けて頂けたらと思います。

今号で令和6年度の元気っ子は最後になります。たくさんの情報を発信してきました。子どもは家庭だけで育てるものでも、保育園だけで育てるものでもありません。家庭と保育園、そして社会全体で育てるものです。子どもたちの明るい未来のために、ご家庭ともしっかりと連携しながら子育てを行っていきたくと思います。令和6年度もたくさんのご理解とご協力をありがとうございました。また来年度もどうぞ宜しくお願い致します。